

とういんグッドニュース新聞は、全国から届けられた身近なグッドニュースでつくられる新聞です。
健康と活躍のまち東員町から、毎月ポジティブな話題を発信しています。



朴 恵淑さん
三重大学特命副学長(環境・SDGs担当)※(2023年3月31日)
WHOアジア・太平洋環境保健センター(WHOACE)初代所長

朴 恵淑さん 三重大学には、環境・経済・社会の調和のとれたSDGsの実現に向けて、地域と世界をつなげる多様な活動を行なう多くのクラブがあります。そのなかで、2030年の達成をめざすSDGsの大命題である「誰一人取り残さない」を私たちが実現させるという目標を掲げ、積極的な活動を行なっているの

三重大学ESDI-SDGsクラブ
三重大学特命副学長・朴 恵淑さん
水谷 俊郎町長

座談会
おみごと!がふれる東員町
創生と次世代人材育成

2023年2月3日(金)、東員町役場にて「おみごと!がふれる東員町創生と次世代人材育成」と題した座談会が開催されました。
東員町が「第6次東員町総合計画2021-2030」で掲げる5つのテーマを中心に、2時間にわたって行なわれた議論の様子を、全面特集としてお届けします。

朴 恵淑さん 三重大学には、環境・経済・社会の調和のとれたSDGsの実現に向けて、地域と世界をつなげる多様な活動を行なう多くのクラブがあります。そのなかで、2030年の達成をめざすSDGsの大命題である「誰一人取り残さない」を私たちが実現させるという目標を掲げ、積極的な活動を行なっているの

朴 恵淑さん 三重大学には、環境・経済・社会の調和のとれたSDGsの実現に向けて、地域と世界をつなげる多様な活動を行なう多くのクラブがあります。そのなかで、2030年の達成をめざすSDGsの大命題である「誰一人取り残さない」を私たちが実現させるという目標を掲げ、積極的な活動を行なっているの

座談会
おみごと!がふれる東員町
創生と次世代人材育成

「ESDI-SDGsクラブ」です。今日は、ローカルとグローバルをつなぐ、グローバル活動の成功事例である「東員町」について、みなさんと一緒に考えようと集まりました。よろしくお願ひします。
水谷 俊郎 町長
今日は「おみごと!がふれる東員町創生」などについて、ざっくばらんに議論させていただきながら、その実現に向けてみなさんと一緒に考え、行動につなげられることを期待しています。よろしくお願ひします。

「三重大学ESDI-SDGsクラブ」は、在学生と留学生とともに、ESDI-SDGs(※)の達成をめざした活動として、三重県の自治体との連携によるSDGs講演会や展示会を通じて普及啓発活動、地元企業のSDGs経営講演会、伊勢湾の環境保全活動、国際学会での研究発表および国際交流活動を通じて世界の若者とのコミュニケーションおよび協働活動を通じて、ローカルとグローバルをつなぐ、グローバル活動を積極的に進めています。

極のゴールです。その成功事例を、ぜひとも「東員町」で達成できればと思いますので、次世代を担うみなさんの忌憚(きたん)のない意見をいただければと思います。

座談会
おみごと!がふれる東員町
創生と次世代人材育成

今日は「おみごと!がふれる東員町創生」などについて、ざっくばらんに議論させていただきながら、その実現に向けてみなさんと一緒に考え、行動につなげられることを期待しています。よろしくお願ひします。



上(左から) 南部 陽香さん、安部 大樹さん、小西 凌さん、田 甜甜さん
下(左から) 朴 恵淑さん、水谷 俊郎町長

健康長寿の秘訣

小西 凌 三重県内で人口と年少

人口の両方が増加しているのは、「東員町」が唯一とされています。そのなかで健康寿命もだんだんのびてきているというのは、もちろん行政の後押しもあると思いますが、町民の方々の意識がほかの市町とどう違うのか、関心があります。

水谷 健康寿命が長くなるいちばんの要素は社会参加なんです。高齢者の方が、いかに外へ出て、人と共同して何かをやっていくか。それが課題なんですが、「東員町」は不思議な町で、高齢者は定年退職して地域へ帰ってくると家へ引っ込んでしまうもの

と思うのですが、そうではなくて外へ出るんですね。趣味とかボランティアなどいろいろなところへ出て活動をされている。これがいちばん健康寿命をのばす要因だと思います。

たとえば、草間祥介さんという町民の方がいて、61歳から陶芸を始められたんです。定年退職して第二の人生に何をやるのかと、1年間いろいろ探った結果、陶芸が自分に合っていると

子どもと
社会のふれあい

感じ、陶芸クラブへ入りました。そうやって素人から始めたものが、何年かして日本伝統工芸展へ出展したら入選して、2回くらいいのときに出版した大皿を宮内庁が購入されて、それが皇室を通じてオランダ王室に贈られたんです。

このようなケースは珍しいにしても、こういう方が、ほかにたくさんいらっしゃいます。いろんなことにみなさん関心をもつて、レベルの高いものをつくっておられる。それも健康寿命につながるっているんだらうと思います。

もっと身近な例だと、平日の昼間など、高齢者が集団で歩いているのを見かけられます。健康のためだけではなく、人と一緒に会話しながら歩くのが大事ですね。

小西 やっぱり人とのつながりなんです。陶芸なども、ポテンシャルをもっている人は少なくないと思うんです。でも積極性をもって大成するところまでいくかという、なかなか難しい。そういうとき、周りに支援してくれる人がいるのは大きいのかと思います。水谷 町長のお話をうかがいながら、どうやったら



水谷 俊郎町長

自分の住んでいる町でもできるかなと考えてるんですけど。

朴 「東員町」のいいところを自分たちの住んでいる地域に取り入れるというのは大事ですね。事例を紹介して、うまくマッチングすればというのも今日のひとつの狙いでもありますから。

水谷 これも健康寿命につながるものだと思いますが、社会福祉協議会や役場の職員が地域座談会をやっている、高齢者の方を中心に、地域として何をしようかと議論しています。そうするといろんな知恵が出てくるんですが、たとえば、カフェを開き、そこへ学校から帰ってきた子どもが通って、勉強を教えてもらう、会話ができれば、そういう場

ができていく地域もあります。南部 陽香 その場づくりというのを、最終的には個人がされるんでしょけど、きっかけづくりを行政がされているのはすごくいいと思います。

地域全体で子育てを

南部 学校で学ぶ子どもたちがお年寄りと関わる機会は、家に祖父母がいないと難しいんですよね。学校ではできることに限界もあるので、「東員町」のように、地域で先達の知恵を借りられる機会があるのは子どもたちにも刺激になると思います。



水谷 「東員町」では、学校支援員とは別にスクールボランティアに入ってもらっている学校が増えています。地域の、特に高齢者が学校へ行つて、ボランティアでテストの採点などをするんです。その際、ボランティアの方が、ひとことふたこと書き添えて戻したりしている。そうすると子どもが反応する。ほんの1枚のテストが、双方のふれあいの機会になるんです。

それを通じて子どもと地域の人交流するかなができる。学校へときどき来るので、顔を覚えるでしょう。そうするとまちで会ったとき、あいさつしたり、話したりすることで地域の方と子どもたちがつながるのです。

南部 核家族化が進んだり、地域との関わりが薄くなっている世の中で、地域全体として子どもを見るということは難しくなりつつあります。そんななかでお年寄りの方も一緒に学校教育に携って

主体的な学び

南部 核家族化が進んだり、地域との関わりが薄くなっている世の中で、地域全体として子どもを見るということは難しくなりつつあります。そんななかでお年寄りの方も一緒に学校教育に携って



南部 陽香さん 三重大学教育学研究科専門職学位課程

はありがたいし、結果的に教員の負担減から働き方改革につながっていくと思います。

朴 高齢者と子どもが交流できる。学校教育だけではできない生涯教育として、コミュニケーション・スキルにつながっていく。お互いにWin-Winになりますよね。お年寄りは元気になる、子どもたちは知恵を学ぶ。

水谷 お金ではなく生きがいになるんですよ。子どもたちとのふれあいを楽しみに外へ出てきてもらっている。子どもたちもそれを喜んでいる。相乗効果でいろいろなものを生み出していくことが大いに期待できます。

南部 学習指導要領が近年変わってから、知識を注入するばかりではなく、子どもたちの主体的な学びを大切にしようという、より大学などの教育に近いかたちになってきています。子どもたちが体験を通じて「あ、

地域のつながり



小西 凌さん 三重大学地域イノベーション学研究科博士後期課程

これおもしろい」と感じることから学びは始まると思うし、そういう機会は学校だけではなく地域でも得られると思うんです。教育は学校だけではできないというのあらためて感じているので、今後も学校は閉鎖的にならず、地域の方々と一緒にやっていく関係を大事にしていきたいです。

水谷 教育においては、非認知能力をいかに養成するかがいちばん大事だと思っています。それは学校の授業だけでは得られないんです。それこそ地域の人との関わりとか、いろんな社会とのふれあいのなかでしか醸成できない。だから、子どもたちが外の社会の人とふれあう機会は多ければ多いほどいいと思います。

南部 そのきっかけづくりは行政がするにしても、「東員町」のみなさんはそれを使って主体的に学校に関わりたいたいと高齢者の方も言ってくださるということですよ。みんなで学校や町をつくっていくという意気込みや熱心が素晴らしいと思います。

東員ブランドの大豆づくり

安部 大樹 「稼げるまちづくり」として、「東員町」では大豆の栽培に力を入れています。大豆は大事な作物なのに日本では自給率が低いですが、なぜそこに力を入れることになったんでしょうか。

水谷 そもそも農業に取り組むようになったのは、「東員町」の行政面積の約3分の1が農地で、都市計画によって農地以外に転用が利かない。その上、大半が放置されて全然稼げていない。これを無駄に放置しているのは駄目だろうと思いました。

そこで付加価値の高い特産品をつくろうと、まず、ぶどうとブルーベリーを耕作放棄地に植えました。5年くらいかかって、いいものができるとわかったので、今後これを増やしていこうと思っています。

それから2年くらい遅れて、四日市の企業との出会いがあり、「東



員町」で大豆をつくろうという話になりました。その会社では、おからを出さず、大豆をそのまま豆腐にできるんです。

安部 おからって産業廃棄物なんですよね。

水谷 そうなんです。だけど、それが出ないので、大豆がまるごと豆腐や豆乳になる。そういう製品をつくっている、循環型社会のトップランナーのひとつである企業と組んで、「東員町」で始めることになりました。

ただ、ほかと同じ大豆をつくってもインパクトがないと思う、どこにもないものがないということ、私たちが力を入れてるのはナナホマレという、中性脂肪を下げる効果のある品種なんです。これはもともと長野県でつくっていました、その種を持つてきて増やすことができ、いまはもう「東員町」にしかないんです。

朴 「東員町」ブランドになっている。

水谷 オンラインなんですよ。今年はまだ豆乳がつくれそうなので、ところまで収穫できているので、

そろそろ取りかかろうと思っています。

企業との出会いから大豆を育て、加工して、製品までつくる。それを農業者も一緒にやると、農産物の付加価値が高まるわけです。そうすると当然、農業収入の増加にもつながります。

安部 農業をされているお年寄りとお話をすると、もれなくお元気なんですよね。これは健康寿命という話にもつながってくる。

いま、大豆はアメリカやカナダからの輸入がほとんどで、輸送にもものすごく石油などを使うので、それを地産地消できるというのはカーボンニュートラルにもつながると思います。

水谷 農業自体がカーボンニュートラルなんですよね。作物はCO2を吸収しますから。

二酸化炭素ゼロのごみ処理技術

水谷 カーボンニュートラルについては、注目しているごみ処理方法があるんです。大阪のベンチャー企業が開発した、いっさい二酸化炭素を出さないごみ処理方法です。簡単に言うと、箱



安部 大樹さん 三重大学人文学部特任助教
三重大学地域イノベーション学研究所博士後期課程

稼げるまち

たとえば砕いて固めて海へ沈めれば、水質の浄化にもなる。

開発から数年という浅いもので、なかなか普及はしていないんですが、民間ではもう取り入れているところもあるんです。「東員町」の企業でも、導入を検討しているところがあります。

安部 ほかの自治体では、集めたごみをリサイクルするのもそうですが、燃やすときに発電して公共施設で使うなど、ごみを地域のエネルギー資源にしたり、経済資源にしたりと、いろいろな工夫をしています。が、「東員町」の燃やさないごみ処理というのは、さらに一歩先を進んでいると感じます。

水谷 「東員町」が一緒にやっている桑名広域連合でも、燃やして発電はしています。だけど電気をつくるのに二酸化炭素を出しながらやっているわけです。そうじゃなくて、いっさい二酸化炭素を出さないごみ処理方法を、これからは真剣に考えていくべきだと思っているんです。

現在、行政のごみ処理は共同でやっているのですが、すぐには導入が難しいんですが、たとえば、事業所系の産業廃棄物を集めてきて、それを一手にやったらどう

のなかへごみを放り込んで、そこへ600度の過熱水蒸気を注入するんです。すると有機物は炭化して、プラスチックはオイルになり、金属は酸化せずにそのまま残る。つまり、二酸化炭素がいっさい出ない。この出てきた炭を、たとえば砕いて固めて海へ沈めれば、水質の浄化にもなる。

かと、企業と戦略を練っています。行政のごみ処理施設はだいたい10～15年で老朽化のために大規模改修か建て直しの必要が出てくると言われています。そのときに、いまお話しした方法が確立していれば、ごみは処理企業へ持つていくだけでいい。行政として施設を持つ必要がないので、建設や改修の予算もいらないわけです。たとえば処理自体に同じお金を払ったとしても、結果的には安くなる。

将来、地域のごみは行政が処理するのではなく、企業が処理する時代がくるんじゃないかと思っています。しかも二酸化炭素をいっさい出さずに済むので、実現すれば脱炭素社会やカーボンニュートラル社会創生のトップランナーになれると思っています。

朴 水谷町長のおっしゃることは、かなり現実感があると思います。今年（2023年）11月にドバイで開催予定のCOP28（国連気候変動枠組条約第28回締約国会議）において、「東員町」の取り組みを国際的にアピールしませんか？

それくらい、いまのお話はなるほどと思うし、理にかなっています。

日本のイノベーションは非常に高いレベルにいるんですよ。それが国際的にいまいっ受けがよくないのは、積極的なプレゼンやアピールが足りず、うまく伝えられていないからだと思っています。水谷町長のように工学



系に詳しい方が話せば、きちんとわかってもらえるはずです。

私は、水谷町長の話にはすごく説得されました。「東員モデル」ということで、ぜひともCOP28において水谷町長のプレゼンをよろしく願っています。

水谷 まだあくまで夢みたいなものですが。

朴 夢をまず語り、それを若い人たちが実現していく、ひとつのプラットフォームが「東員町」です。よということからスタートすればいいと思います。われわれの呼びかけで、私だけじゃなくて、世界的にみんなやっていくことがグローバル的発想であり、成功につながると思うんです。

カーボンニュートラル

文化が育む町への想い

朴 「文化エネルギーを発信するまちづくり」とありますが、文化において、エネルギーという言葉を使うのはすごく珍しいと思うんです。でも、たしかに「東員町」の文化に関するエネルギーは爆発的なものを持っています。こども歌舞伎、東員ミュージカル、日本語の第九など、「東員町」ならではの文化的行事が多く行なわれていますが、それぞれ自分の仕事や学校がありながら、みんなが集まって学びながら取り組んでいるのが素晴らしい。それを舞台で表現して、また次のステップへ行く。

それもオール東員で、誰でもやる気がある人なら、できるチャンスがあるんですよ。こういうものは、ほかの町ではなかなかない、素晴らしいことですが、東員町民でないと関われないんですか？

水谷 いやいや、近隣の方もたくさん関わっています。四日市、桑名、いなべ、菰野、それから岐阜の方も。

朴 国籍も問わず？

水谷 はい。ミュージカルの1回目にはロシアの方も出たんですよ。女性と子どもの親子です。

朴 まさにグローバル！

水谷 募集はだいたい高校生以上なんです。最近では小中学生の参加もありました。やりとげたあとは、やっぱり全然変わりますね。びつくりするぐらい変わる。子どもたちからそういう



田 甜甜さん
三重大学地域イノベーション学研究科博士後期課程

文化にふれるということは、舞台に立つのもそうですし、手伝うのも、見るだけでも、大きな力につながっていきますね。

南部 自己肯定感を高めるのにも、すごくいいと思います。

朴 人を育てていくというのは時間とお金がかかることですが、その過程において、文化というのは揺るがない基本的な力になるんじゃないですか。

参加した人、特に子どもたちは一生、「東員町」を愛する気持ちは変わらないと思います。そういう人がひとり増え、ふたり増え、「東員町」の大きなエネルギーになっていくのを、若いみなさんが肌で感じることで、さらに多くの人々の力が集まることで、常にプラスのスパイラルとなって、「東員町」のみなさんに還元されていくと信じています。

全国から集めて発信する意味

朴 文化においては、『とういんグッドニュース新聞』を「東員

町」で発行している理由や意義などを、ぜひお聞きしたかったんです。

水谷 世の中の新聞やテレビの報道を見てみると、いいニュースって少ないじゃないですか。というよりは、人間って悪いニュースにばかり

野次馬的な興味を

持つというか、おもしろがるどころがあると思うんです。一方で、いいニュースは目に入りにくいし、探してもなかなか見つからない。だったら、読んで心があたたかくなるようなニュースだけを集めたメディアがあってもいいんじゃないかと思ったのがきっかけでした。

この新聞を読んで腹を立てるような人はいないと思うんです。そういう記事を全国から集めてますから。

朴 ものすごくオープン・マインドな発想だと思います。名前は『とういんグッドニュース新聞』でも「東員町」には限らず、全国からということですね。

田 甜甜 じゃあ、外国人も歓迎ですか？

水谷 大歓迎です。全国、もつというところから「東員町」に投稿していただければと思っています。この新聞は「東員町」の関係人口を増やすツールでもありますから。これを成功させて

海外へも持っていって、中国語や英語でもその国独自のグッドニュース新聞が生まれたら、というのが夢ですね。

朴 いいですね。グローバルでいきましょう！

官学産

まとめに
産学官一体の
まちづくりへ

朴 三重大学としても、地域共創大学という名のもとで、地元根を下ろして地域とともに発展していければと思いますが、特に若い人たちが、若い感性とやる気でリーダーシップをとることによって、多くの成功事例をつくることにつながります。

「東員町」の応援団になって、大学のみならず、地域との連携によって、生きる知恵を学ばせていただくことで、三重県全体のプラスにもなっていくはずです。「東員町」の総合計画は、これからの10年間のものとなりますが、必ず見直しは必要です。そのなかで「東員町」のみなさんだけではなく、町外から応援してくれる人たちとともに、「東員町」のさらなる発展を図っていききたいと思っています。

水谷 これからは行政の力だけではやっていけません。特に地方行政は、これまで何かあると県へ頼る、国へ頼るとやっていけば済んでいたのが、これからは自分たちで自分たちの町を守っていかなければならないと思っています。

そうしたときに、産学官での連携は必要不可欠です。これからはアカデミアの「学」、企業の「産」と組むことをやらないと、行政は成り立っていきません。

大豆をはじめ、いろいろなところで企業と一緒にやってこれからのまちづくりをしていくということ。大学からの知恵を借りながら行政を運営していくということ。これが今後の地方行政にいちばん大事なことで

えています。ぜひ、みなさんにも、いろいろなお知恵をこれからも拝借させていただければと思っています。今日は、本当にありがとうございました。



編集室より

日常的な町の光景のなかにも、外からの視点加わることで「これって実はすごいことだったんだ！」というものがたくさんあるのだと、あらためて気づかせてもらえた座談会でした。

客観的な目を通じて町の魅力を再発見し、町外の大学や企業とも手を携えていくことで、誰も取り残さない、理想的なまちづくりが実現していくものと信じています。

●とういんグッドニュース新聞に関するお問い合わせ
東員町役場 政策課 広報秘書係まで（2023年4月以降）
（0594）861-2862